

京都大学	博士(文学)	氏名	田 中 志瑞子
論文題目	清原家における学問の継承と形成 — 宣賢の聴塵類を中心として —		
(論文内容の要旨) 清原宣賢は室町時代後期の儒学者で、家の証本や抄物を多数作成したことから、清原家の家学を大成した人物として知られる。宣賢以前の清原家からは、良賢や業忠といった大儒が出ており、清原家の学問を盛り立ててきた。特に宣賢の祖父にあたる清原業忠は、禅僧からも師と仰がれるほどの学者であったという。しかし清原家は、応仁の乱によって、家伝来の典籍・文書類を焼失してしまう。これは家の存続にも関わる深刻な事態だったはずであり、宣賢が証本の書写や抄物の作成を精力的に行った背景には、火災によって失われた典籍類を補い、家学を再興させなければならないという危機感があったのではないかとと思われる。 本論文の目的は、宣賢が抄物を作成する際に、どのような目的意識を持って新注を採用していたかを明らかにすることである。 経学には、漢唐以来の訓詁を中心とした古注と、宋代に生まれ、「理」の追求を重視する新注との二つの注釈の流れがある。抄物から窺える宣賢の学問は古注と新注を折衷したものであるが、これは、禅僧によってもたらされた新注が知識人の間に広く受け入れられた室町時代にあって、古注による伝統的な家学だけでは清原家の権威を守ることができなくなっていたからだと解釈されている。しかし、伝統が清原家の存在意義である以上、新注を取り入れることがすなわち家学の擁護にはならないはずであり、宣賢の学問における新注の役割を考えることは、清原家学がどのように守られ、伝えられたかを知ることにつながるのではないだろうか。 本論文における調査対象は、五経(『易』『書』『詩』『礼記』『春秋])の抄物とした。経書には四書五経という枠組みがあるが、四書(『大学』『中庸』『論語』『孟子])は朱熹が『礼記』の中から「大学」と「中庸」の二篇を独立させたことにより始まっており、必然的に朱子学、つまり新注との結びつきが強い。それに対し五経は、朱子学の成立以前から儒教の経典として定められており、明経道の科目に用いられてきた。明経博士を世襲してきた清原家は、五経の解釈を代々受け継いでおり、その解釈の中に新注の影響が窺えるとすれば、家学の変化として注目すべきことと考えられるからである。 宣賢が講義のために作成した抄物のうち、五経を原典とするものは『尚書聴塵』『毛詩聴塵』『左伝聴塵』の三本である。本論文ではこれら三本を用いて論を進め、さらに建仁寺両足院蔵『左伝抄』、京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室蔵『毛詩国風篇聞書』を通じて、宣賢の学問に対する姿勢を考察する。			

第一章『尚書聴塵』における新注摂取の様相」では、『尚書聴塵』に採用された新注の特徴について論じる。『尚書聴塵』には複数の諸本が伝わるが、第一章では宣賢自筆本と建仁寺両足院蔵本とを用いた。両足院蔵本は宣賢と師弟関係にあった林宗二を書写者に含み、『尚書聴塵』の諸本の中でも特に、宣賢自筆本と密接な関係にある可能性が高い本である。また、両足院蔵本は現存する宣賢自筆本よりも古い本文を伝えていると見られ、両者を比較することによって、宣賢が『尚書聴塵』に行った改稿、すなわちどのような新注を採用していったのかという点が明らかにできるのである。

両足院蔵本から現存する宣賢自筆本へ至る間に、新注の採用数はおよそ十倍程度、増加していた。新注はどの巻にも偏りなく採用されており、宣賢が『尚書』の解釈に、新注を積極的に活用していたことは間違いない。ただし個々の新注の内容を検討すると、古注の解釈と矛盾しないものや、古注が言及しない事柄を補い、古注による解釈をよりわかりやすくする働きをもつものが八割ほどを占めていた。古注と異なる解釈を示す新注も採用されてはいるが、それに従って古注の解釈を改めることは稀であった。この傾向は両足院蔵本、宣賢自筆本のどちらにも当てはまり、宣賢が一貫して、古注を補うために新注を利用していたことが窺える。このことから、『尚書聴塵』における新注は、古注を基準として作り上げられてきた清原家の解釈を、補強する目的で採用されたものと考えることができる。

第二章『毛詩聴塵』の成立」では、『毛詩聴塵』の成立背景を通じて、清原家の『毛詩』解釈と新注との関わりについて論じる。宣賢の関わる『毛詩』の抄物には、『毛詩聴塵』のほか、宣賢の講義の聞書である『毛詩抄』と、宣賢自身が聞書者となった『毛詩国風篇聞書』があるが、『毛詩聴塵』の中には『毛詩国風篇聞書』と類似する抄文が多く見られるため、『毛詩聴塵』は『毛詩国風篇聞書』を取り入れながら成立したと考えられている。しかし『毛詩国風篇聞書』は零本であるために、『毛詩聴塵』全体との比較ができない。そこで『毛詩国風篇聞書』を取り込んだことによって、文語文を基調とする『毛詩聴塵』にも現れることとなった口語的な表現に着目し、『毛詩聴塵』の中に『毛詩国風篇聞書』がどの程度利用されているかを検討した。調査の対象としたのは助動詞（ベイ・ベシイ・ウ・ウズ・ラウ）とオノマトペであるが、助動詞とオノマトペはどちらも巻一から巻四に用例が集中し、巻五以降はほとんど見られなくなる。このことから『毛詩国風篇聞書』は、『毛詩聴塵』の巻四までしか利用されていないのではないかと推測される。

一方『毛詩聴塵』は、『毛詩国風篇聞書』を通じて新注も取り込んでおり、新注の用例もまた、巻四までに集中する。この事実は口語的な表現と同様、『毛詩聴塵』が『毛詩国風篇聞書』を巻四まで利用したことを示すとともに、宣賢が『毛詩』の解釈に、進んで新注を採用しなかったことを示唆していると思われる。したがって『尚書聴塵』

とは異なり、『毛詩聴塵』からは、新注を積極的に活用しようという意識を読み取ることができない。

第三章「『左伝聴塵』における新注の位置」では、『左伝聴塵』において新注がどのような価値を持つものであるかを論じる。『左伝聴塵』は先行抄に恵まれており、奥書によれば、清原良賢、業忠、そして宣賢自身の聞書を利用して作られているという。清原家にとって『春秋左氏伝』の講授は「家業」だと意識されていたらしく、先行抄が複数伝わるのも、「家業」である『春秋左氏伝』が特に重要視されていたからだと考えられる。

『左伝聴塵』には新注の利用がほとんど見られない。『春秋左氏伝』は五経正義が編まれて以来、春秋学の正統と重んじられてきたが、中国では宋代に入ると、『春秋左氏伝』も『春秋』の注釈のひとつに過ぎないとして、朱子学派から解釈の欠点や不備を批判されるようになった。宣賢にとって、『春秋左氏伝』に批判的である新注は採用しづらいものだったはずであり、また新注はあくまで『春秋』の注釈であって、『春秋左氏伝』の注釈ではないことも、『左伝聴塵』に新注が利用されない理由ではないかと思われる。ただし新注は皆無ではなく、管見の限り、卷十四の前半までに十五例が採用されている。利用する新注書は複数あるが、『春秋』の新注書の代表とも言える胡安国の『胡氏春秋伝』は、利用が確認できない。

第二章で『毛詩聴塵』は口語的な表現と新注の出現する巻が一致していると指摘し、その原因を、先行抄である『毛詩国風篇聞書』の利用の有無であると考えた。『左伝聴塵』においても同じ現象が見られ、口語的な助動詞(ベイ・ベシイ・ウ・ウズ・マイ・マジイ)と「サウ(候)」「マラスル」の用例は、卷十四の前半までに集中している。宣賢が利用したという良賢や業忠の聞書がどのようなものであったかが不明である以上、推測の域を出ないが、『左伝聴塵』における新注の利用が限られており、また現れる巻が偏っていること、それにもかかわらず、採用された新注の出典が多彩であることなどを考え合わせると、『左伝聴塵』に見られる新注は、『毛詩聴塵』の場合と同様に、何らかの先行抄を通じて取り込まれた可能性があるのではないだろうか。すなわち『左伝聴塵』に採用された新注は、宣賢にとって新注としての価値を持つものではなく、先行抄から取り入れた説としての価値を持つものであり、『春秋左氏伝』の解釈に、新注は必要とされていなかったと考えられる。

第四章「建仁寺両足院蔵『左伝抄』について」では、建仁寺両足院が所蔵する『春秋左氏伝』の抄物四種の性格を論じ、そこから清原家の『春秋左氏伝』に対する学問的姿勢を考察する。左伝抄四種の内訳は、漢文抄が二種(A本、B本)、仮名抄が二種(C本、D本)である。C本を除く三本は複数人によって書写されているが、すべてに林宗二の筆が確認できる。

A本とB本は『春秋左伝正義』と『左伝句読直解』を抜粋して作られている。訓読に関する注記の方法や、書写者が共通していることから、従来の指摘通り僚巻と判断できる。またB本と、京都大学附属図書館清家文庫蔵『春秋経伝集解』に綴じ合わされた漢文抄とは同じ本文を持っており、A本、B本はこの漢文抄の諸本での一つあることがわかった。清家文庫蔵『春秋経伝集解』は巻一から巻十が現存しないが、漢文抄の本文については、A本によって補うことが可能になる。

C本は宣賢の講義の聞書である。巻三のみではあるが、宣賢の『春秋左氏伝』講義を記録した貴重な資料であり、C本によって、宣賢が清家文庫蔵『春秋経伝集解』や、そこに綴じ合わせた漢文抄を使って講義を進めていたことが確認できる。

D本は奈良出身の医僧・一栢現震の講義の聞書である。一栢は永正年間に関東から上洛し、医書や経書の講義を行った人物である。D本の成立には複数の人間関わったと思われ、その中には清原家の人間も含まれている可能性が高い。『左伝聴塵』や清家文庫蔵『春秋経伝集解』を見る限り、一栢の講義が清原家に影響を与えた形跡は確認できないが、清原家が一栢の学説も知ろうとしていたことは注目すべきであり、他者の講義からも積極的に学び取ろうとする清原家の姿勢を見ることができる。

附章「伝三条西実隆『毛詩国風篇聞書』について」では、『毛詩国風篇聞書』の資料的性格について、改めて述べる。『毛詩国風篇聞書』の伝承筆者は三条西実隆であるが、比較できる実隆筆の片仮名資料が乏しく、この点については判然としない。ただし、書写年代は室町時代後期と見て良いと思われる。

『毛詩国風篇聞書』は禅僧・景徐周麟の講義を、宣賢が聞書した抄である。講義そのものも宣賢によって発起されており、宣賢が景徐の講義を重要視していたことが窺える。宣賢が景徐の講義を発起した理由については、先行研究によって指摘されている通り、景徐を通じて清原業忠の『毛詩』講義の内容を知るためだったと推測される。景徐は業忠の『毛詩』講義を聴聞したことがあり、『毛詩国風篇聞書』の中に業忠の学説と思われる記述も見られるからである。

第二章で論じる通り、『毛詩国風篇聞書』は『毛詩聴塵』に先行する資料であり、『毛詩聴塵』の成立に与えた影響は大きい。二十丁にも満たない零本ではあるが、宣賢が家学の継承に尽力していた事実を示す資料と言える。

以上、本論文は五つの章にわたって、清原宣賢の抄物に利用された新注が持つ意味について考えてきた。新注の採用頻度という観点からは、『尚書聴塵』『毛詩聴塵』『左伝聴塵』の三本に共通点は見出せない。しかし『尚書聴塵』が採用する新注の大半は、清原家の解釈を補強する働きをしており、家説を守るものである。一方『毛詩聴塵』と『左伝聴塵』の場合も、歴代当主の学問を受け継ぎ、家説を守るために、新注を含んだ先行抄の記述を取り込んだのである。『尚書聴塵』『毛詩聴塵』『左伝聴塵』を比較

したとき、新注に対する姿勢はそれぞれ異なるように見えるが、宣賢は一貫して、代々の家学を受け継ぎ、さらに確固たるものにするための行動をとっていたと言える。これは一栢現震の『左伝抄』や、景徐周麟の『毛詩国風篇聞書』から浮かび上がる、家学のために研鑽を積む宣賢（もしくは清原家）の姿とも一致する。

(論文審査の結果の要旨)

抄物とは、室町時代中頃から近世に掛けての漢籍・仏典の講義の際の聞書、あるいは手控えをいうが、片仮名で書かれた抄物には、室町時代の口語が現れ、中世日本語研究の重要な資料となっている。本論文は、主として清原宣賢の関わった五経の抄物を研究対象として、清原家の家学の中に、どのように新注が受け入れられているかを実証的に確認してゆくことをテーマとする。清原家は、朝廷で儒教經典の研究教育を担当していた明経家で、宣賢は室町時代に家学を再興した碩学である。清原家に伝えられた典籍は京都大学附属図書館「清家文庫」として保存されている。清原家の家学は古注を基礎としていたが、日本でも五山僧を中心として新注が広まったため、清原家学にも新注の影響が見られるようになったといわれている。

まず、「尚書」については、「尚書聴塵」の各伝本の全巻調査を行い、全巻に渡って「書集伝」を中心にして、新注が利用されていることを明らかにし、古い本文を伝える両足院本と比べると清家文庫自筆本では、引用が十数倍にもなっている巻があることから、宣賢が時代とともに新注を利用することが多くなったと推定した。しかし、その新注の利用は、古注の解釈と矛盾しないもの、古注の解釈を補うものが大多数を占め、古注の解釈を変えるものはほとんど無いことから、新注を摂取しながらも、古注を守っていた実態が明らかになった。

「毛詩」の抄物については、清家文庫本「毛詩聴塵」に「詩集伝」などの新注が引用されるが、ほとんど巻四までに集中しており、京都大学国語学国文学研究室蔵「毛詩国風篇聞書」(景徐周麟講義)とはほぼ同じ文章があつて、この「毛詩国風聞書」、あるいはその祖本を利用して「毛詩聴塵」が編纂されたことは知られていたが、それを「毛詩聴塵」の全巻精査によって確認し、新注が多い所には口語的表現とオノマトペも多いこと、巻五以降には新注は非常に少なくなることなどから、「毛詩聴塵」の新注利用は、編纂に使用した聞書を通じてのものであろうとする。少数の「毛詩国風聞書」と一致しない新注については宣賢が新注を参考にしつつ引用したものだろうと推定した。

清原家では「家業」と表現され、特に重視された「左伝」については、「春秋左伝正義」と「左伝句読直解」を解釈の基本にしており、新注は非常に少なく、古注を否定する新注は利用しづらいものであったとする。左伝の場合でも新注を利用した箇所は口語的表現が現れるところから、先行資料を利用したために新注と口語的表現がセットになって出現するのであろうと推定する。「左伝聴塵」は清家文庫「春秋左伝集解・漢文抄」の漢文抄を利用して編纂された物であること、次に、両足院本の左伝抄の零本四種(A、B、C、D)についても、漢文抄A、Bが「春秋左伝集解・漢文抄」と同系本に基づくものであり、同書の欠巻部を補うことができること、仮名抄Cは清家文庫本「春秋左伝集解・漢文抄」の漢文抄と一致する本文があること、つまり宣賢の講義聞書であること、仮名抄Dが一栢現震の講義であり、清原家は一栢の学説にも興味を抱

いていたことを明らかにし、新注だけでなく、諸学説にも注意を払い、家学の充実に努力していたことを示した。

本論文で確認された新注の引用は、書名が書かれたもの以外に、単に「欧陽云」「古人語」と書かれたもの、また何の表示も無いものもあり、長大な抄本文から、原典の該当部分を確認することは極めて労力の要る作業であり、その中から成果を出してきたことは大きく評価できる。しかし、僅かであっても古注を棄て、新注を採用している理由や新注利用の量が各巻によって違っていることなど、まだ明らかにしなければならないことも残っている。

以上、審査したところより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2012年2月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。